17

江戸期の義眼史

奥沢　康正[1]・広瀬　秀[2]

ヴォルフガング・ミヒェル氏は一六五四年日本に初めて義眼七個が入荷し、使用法が添付されていたと報告されている。西洋義眼史についてはすでに一九一〇年ミュルレルが Das Künsthiche Auge. von Friedrich A. und Albert C. Müller in Wiesbaden. Verlag von J.F. Beromann Wiesbaden に詳細に述べている。この書によると十六世紀の終り頃にはすでに金及び銀製の義眼、硝子製挿入義眼、眼瞼上に附着する義眼（前置義眼）の三種が用いられていたとするが、各義眼が誰によって考案されたのかは不明であり、一五六一年パレが当時用いられていた義眼の図と共にこれに関する詳細な説明を報告したのが初めとし、パレは単に新奇なものとして著述したのみであると述べている。当時硝子製造業が最も盛んであったことからその後西洋では硝子義眼が発達した。

西洋での発達史から日本に輸入されたのはおそらく硝子製義眼であったと考えられるが、他方日本ではいつ頃誰によって如何にして義眼が製作されたのであろうか。演者は本庄普一著『眼科錦嚢』（天保二年刊）、上田公鼎治験・安田玉海著『眼科一家言』（天保十三年刊）、広瀬秀が第一〇三回日本医史学会総会に報告した近藤文泰筆録『楽製造眼仕方極秘之伝』、『醜眼陶造秘方』、『竹山屯筆録』（一八六六・一・十九）から〝義眼〟の項を採録し、江戸期の眼科医と義眼製作者の関わりをはじめ、義眼製造法及び義眼適応症につきその変遷を考察した。

上田公鼎は義眼の素材を獣角に求め、本庄普一は疫眼、風眼などにより片眼失明した患者に硝子義眼を健眼に似せて製作、眼球陥凹の著しい症例では義眼の後面に洋蠟を充塡すると述べ、両者は義眼が非常に高価で売られている現状を憂い、製作にあたり技工師（玉匠師）に依頼している。近藤文泰は硝子義眼の難点を記し、陶製の義眼（素焼に角膜・瞳孔を彩色し、光沢を加えそれぞれ三工程でもって焼）を製作し、眼球突出の著しい症例には眼球内容除去術を事前に施行したり、義眼の裏面を研

磨する等補正の利点を述べている。

ボードインの講義録では眼球と眼球運動の有無、眼球凹凸の程度、健眼虹彩の大きさ、結膜の色彩を義眼師に、詳細に説明し、医師は結膜嚢の形成、眼球摘出の可否を熟慮し、義眼洗滌の方法を詳細に教えている。ボードインもまた義眼は非常に高価であり、貧者には用い難いと述べ、明治初期迄富者にのみ利用されている。

以後ドイツからの義眼輸入と共に、高橋江春が眼科医として硝子義眼製造に成功し、明治十八年『義眼要弁』を著し以後硝子義眼が普及した歴史が見える。

これ等のガラス義眼に至るガラス製造史と共に義眼史の背景を探りたい。

（京都府立医科大学[1]）
（広瀬歯科医院[2]）